

辺野古通信

第33号 2013年1月16日



12/24 辺野古

基地内の不気味なマーク

発行: 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

オスプレイ配備撤回を求め沖縄から代表団130人が政府要請行動!

■沖縄では年末も12月28日、29日と米兵による事件が続いたが、年明け早々も、正月気分どころではない。1月3日から騒音をまき散らし、オスプレイの飛行訓練が開始された。4日には、MV22 オスプレイ12機が普天間に7月までに追加配備されることが報道され、8日には、嘉手納基地に来年から2年間で9機の空軍仕様CV22 オスプレイの配備計画が明らかになった。狭い沖縄に33機のオスプレイが配備されることになる。10日には、日本政府が2月の日米首脳会談前に辺野古移設に向けた公有水面埋め立て申請をする方向で検討を始めたことが報道された。すでに12月18日、沖縄防衛局は知事意見を踏まえた普天間アセス補正評価書を提出し、1月29日までの公告縦覧手続きも始めている。「いつまで植民地扱い」「米国のしもべ」と怒りの声がかかる(1/11 沖縄タイムス)。■12月23日、普天間基地周辺で怒りの御万人(うまんちゅ)大行動(約3000人)、神奈川・厚木基地周辺で怒りの神奈川行動(約800人)の同時行動。いずれも曇天で肌寒い一日だったが、日米両政府に対する怒りの声が充満し、熱気あふれる集会とデモが展開された。私たち沖縄講座は、手分けして二つの行動に全力で取り組んだ。(2・3頁) ■御万人大行動の翌日24日には辺野古と高江を訪

問し、カンパを渡した。高江では作業員がゲート前監視行動をかいくぐって基地内に入りオスプレイパッド建設工事を進めている。辺野古では安次富浩さんに話を聞いた。シュワブの浜のフェンスに飾られた横断幕を覗みつけるかの様に、基地の建物に不気味なマークが描かれていた。■国防軍創設・集团的自衛権行使・9条改憲を掲げた安倍政権の再登場で沖縄問題(=日本問題)の解決がさらに遠のいたかに見える。しかし、自民党沖縄県連や仲井真知事をはじめとした保守系首長も、今のところオスプレイ反対・普天間県外移設の態度を変えたわけではない。1月下旬、沖縄県下41市町村の首長と議長、議員約130人が対政府要請行動を展開する。27日は日比谷野外音楽堂の集会とデモ、28日からは代表団の要請行動を支える取り組みを行う。■オスプレイ飛来が予想される厚木基地を抱える神奈川では、今後も集会やデモなど沖縄配備撤回・厚木基地飛来反対の様々な取り組みを計画。2月24日には沖縄平和運動センターの山城博治さんを講師に、「オスプレイ配備拒否! 沖縄とともに闘う大和集会」を開催する。多くの参加を! ■辺野古・高江カンパは累計1,357,085円(1月14日現在)。引続きカンパを! 郵振00210-0-2021 沖縄連続講座

オスプレイ配備反対沖縄県民大会実行委による総理直訴東京行動へ

1月27日(日) 配備撤回、普天間閉鎖・返還を求める東京集会
15時—日比谷野外音楽堂 集会後、銀座パレード

1月28日(月) 総理直訴行動・関係大臣等要請
10時 衆議院第二議員会館前集合 国会周辺にて激励・連帯行動
沖縄県内41全市町村の首長と議長、議員など約130人が参加予定。

12.23怒りの御万人大行動に3000人!

12月23日、普天間基地周辺で、オスプレイ強行配備と相次ぐ米兵犯罪に対する怒りを音楽や踊りで表現する「怒りの御万人（うまんちゅ＊）大行動」が開かれ、3000人以上が参加した。宜野湾市海浜公園屋外劇場で11時から始まったイベントでは、まず沖縄市山里青年会が勇壮な演舞を披露。4人姉妹の民謡グループ「でいご娘」が登場すると、大山ゲート前で早朝行動を続ける熟年者のグループ「命どう宝・さらばんじの会」（＊＊）のメンバー約40人が舞台前に現れ、民謡に合わせて踊り会場を盛り上げた。

12時から集会が始まる頃には、会場がほぼ埋まってきた。司会の沖縄平和運動センター・山城博治事務局長が開会を宣言し、まずシュプレヒコール。自民党の安倍晋三総裁が総選挙後の21日の記者会見で「普天間飛行場の名護市辺野古への移設推進」を明言したこと（22日の地元紙は一面トップで報道）に触れ「屈することなく、県内移設に反対する沖縄の総意を突き付けよう」と呼び掛けた。普天間爆音訴訟団の桃原功さん、名護ヘリ基地反対協の安次富浩さんから闘争報告と提起。安次富さんは、年明けに政府が辺野古沖の埋め立て申請に踏み切る情勢の中で、仲井真知事が「名護の地元が反対しているから辺野古は無理」と微妙な言い回しで繰り返している点に注意を喚起。2014年1月の名護市長選挙の帰趨が重大な意味を持つと指摘し、参加者に名護市長選勝利へ向けた協力を要請した。続いて沖縄選出の国会議員団から発言があり、集会アピールを採択した。



13時過ぎから、海浜公園から普天間基地の大山ゲート前まで、約2.3キロをサウンドパレード。沖縄出身の若いアーティストが乗った車両約10台がデモの列の間に入り、ジャズやテクノ、フラダンスなどを披露。デモ参加者は体を揺らしながら「オスプレイ撤去」のプラカードを掲げ、沿道やドライバーに笑顔でアピールした。大山ゲート前は沖縄県警の警備車両でいっぱいだったが、基地に通じる道路脇の公園を参加者が埋め尽くし、普天間基地に向かって怒りの声を浴びせた。ゲート前の総括集会で、山城事務局長は「きょうのサウンドデモは画期的。沖縄の闘いは新たな地平に立った」と若いミュージシャンたちを全員紹介。実行委共同代表で第三次嘉手納爆音訴訟原告団の新川秀清団長は「75年の人生でこんな楽しいデモは始めて。しなやかに闘うことが必要だ。音楽を鳴らしながら来年も声を上げ続けよう！」とこやかに語った。

＊「うまんちゅ」→「すべての民衆」

＊＊「さらばんじ」→「真っ最中」「最盛期」
いずれも沖縄の言葉。

怒りの御万人大行動・アピール(要旨)

県民の反対を押し切って普天間飛行場に強行配備されたMV22 オスプレイに対する抗議行動はやむことはない。今や普天間飛行場は県民の怒りに包まれている。他方で女性に対する性暴力、民家への乱入など米兵による凶悪事件が頻発しているが、日本政府は責任を放棄し、県民の怒りは沸点に達している。

東村高江ではヘリパッド建設反対運動、名護市辺野古では普天間代替基地建設反対運動が続き、与那国では自衛隊基地建設に反対する取り組みが始まった。

日米両政府に購蹴され続ける沖縄の怒りを発信しオスプレイ配備反対の決意と米兵の凶悪事件を許さない怒りを表明する。全国から参加を求め飛行訓練の中止を求める。平和的なデモ行進として音楽や踊りで演出した、したたかでしなやかな大衆運動をつくり日米両政府と米軍当局に対峙し続けていく決意を表明する。



普天間基地大山ゲート前公園を埋め尽くす!

厚木基地に向け約800人で抗議行動



厚木基地正門近くの東柏ヶ谷近隣公園（海老名市内）で開かれた「怒りの神奈川行動」には、約800人が結集。集会ではオスプレイの普天間配備や相次ぐ米兵の事件・事故を批判、普天間飛行場からのオスプレイ撤退を求め、厚木基地などへの

飛来や低空訓練飛行反対を訴えた。沖縄平和運動センターから「神奈川でも同時行動が展開されることに、心から勇気を覚える」との連帯メッセージが読み上げられると大きな拍手。オスプレイの訓練拠点として名前が挙がっているキャンプ富士を抱える静岡からも連帯挨拶。東京から沖縄一坪反戦地主会・関東ブロックのメンバーからも合流し「オスプレイ沖縄配備撤回」「オスプレイはアメリカに帰れ」「低空飛行訓練反対」と訴え、厚木基地正門までデモ行進。ゲート前を包囲するようにして抗議の声を浴びせ、6団体がそれぞれ配備撤回と米軍犯罪の根本解決などを基地司令官に申し入れた。

集会宣言

2012年12月23日

本年10月、米海兵隊の垂直離着陸輸送X22オスプレイの配備が強行された。オスプレイは開発段階から墜落事故を繰り返している欠陥機だ。今年だけでも、モロッコとフロリダで墜落事故を起こしている。その欠陥機があろうとく、人口密集地の真ん中、世界で一番危険と言われる沖縄・普天間基地に配備されたのである。/沖縄では、県下41自治体の首長、議会が配備拒否を表明、議決している。9月9日に開催された県民大会には、10万人を越える人々が集まり、改めてオスプレイ拒否の意思を示した。文字通り、島ぐるみの闘いがくり広げられているのだ。/にもかかわらず、日米両政府は配備を強行した。加えて、配備直後から始まった飛行訓練では、安全確保のために交わした日米間の約束も全く守られていない。夜間飛行だけでなく、住宅密集地、学校の上空を、事故発生率の高い垂直離着陸モードで飛行しているのである。/オスプレイの配備直後、米兵による集団暴行致傷事件などの凶悪事件が相次いで起きた。沖縄では、1972年の本土復帰後に限っても、米兵が起こした刑事事件は5747件、凶悪事件は568件を数える。国土の0.6%の面積に74%の在日米軍基地が集中する、過重な基地負担がこうした事件を引き起こしているのだ。オスプレイの配備強行と相次ぐ凶悪事件は表裏の関係にあると言わなければならない。



神奈川県は県央部、普天間基地と同じく人口密集地の真ん中に居座る厚木基地でも、事件、事故が相次いだ。/本年2月8日、空母ジョージワシントンの艦載機が部品を大量に落下させ、厚木基地北側の県道を走行していた自動車に損傷させた。人身への被害はなかったが、一歩間違えれば大惨事だった。5月には、5年ぶりの夜間離着陸訓練が強行された。違法爆音は改められることなく、40年も続いている。7月には、厚木基地所属の米兵が日本人女性への強姦事件を引き起こした。/そして11月、米軍のオスプレイ飛行計画に、厚木基地が飛来先として記されていることが明らかとなった。空母艦載機の爆音に加えて、欠陥機オスプレイが墜落の危険ともども、やって来ようとしているのだ。/私たちはオスプレイの厚木基地への飛来を拒否する。全国各地で行われようとしている低空飛行訓練に反対する。そして、飛来、訓練の基になっている普天間基地からのオスプレイの撤退を求める。/今この時刻、沖縄・普天間基地に向け、行われている「怒りの御万人(うまんちゅ)行動」と呼応し、私たちも厚木基地に向け、怒りのデモ行進を行う。基地のない沖縄、基地のない神奈川をめざし、沖縄の人々とともに闘っていこう。



「尖閣問題」を考えるための二つのキーワード

一つ目のキーワードは右の社説に出てくる「生活圏」。この視点は「領土ナショナリズム」を煽って国境の緊張を高めるヤマトの政治家の無責任な言説を批判する沖縄の人々の声として地元紙に掲載される投稿などで繰り返し言及されている。

もう一つは、戦後日本が抱えた「領土問題」に潜む「米国ファクター」。豊下梢彦は、米国には屈従し、韓国や中国の批判や抗議には居直る「戦後日本の歪なナショナリズム」を鋭く指摘している（『「尖閣問題」とは何か』）。米軍の射爆撃場として尖閣諸島五島のうち二島（久場島、大正島）を提供しながら「中立の立場」を採る米国の「あいまい」戦略が、「日中間に領土問題という絶えざる紛争の種を残し、米軍のプレゼンスを正当化する」戦略であることが的確に指摘されている。同書には「明治以来の日本の支配層には、『固有本土』と『固有の領土』という二つの領土概念がある」「後者は、（中略）『固有本土』の安全を確保するための犠牲になったり、場合によっては『捨て』られる対象となってきた」、そして『固有の領土』とする支配層の沖縄認識が、現在の沖縄の軍事植民地状況につながっているという重要な指摘がある。ぜひ一読を！



沖縄タイムス社説【尖閣問題】共生の海へ外交発信を(1/6)

正月番組で息をのむ映像に出合った。国際宇宙ステーションから超高感度カメラで捉えた地球の夜景だ。人類の技術の粋を目の当たりにし、あらためて感じたのは、こうした英知が人倫には及んでいない現実への歯がゆさだ。／尖閣諸島の領有権をめぐる中国との緊張関係が続いている。岩のような無人島を紛争の火種とする愚かさは、多くの人々が認識している。それでも回避する手だてが容易には浮かばない。軍事的なリスクにも向き合わざるを得ない現状だ。だからこそ今、求められているのは、軍事に軍事で対抗する悪循環を断つ大局観だろう。／なぜこうなったのか。東京都知事（当時）の石原慎太郎氏が「尖閣買い取り」を打ち上げたのが発端であるのは論をまたない。自らの政治的地歩を固めるために「領土」を利用するのは許し難い。が、石原氏や民主党あるいはかつての自民党政権を批判したところで事態収拾にはつながらない。かといって、「中国が悪い」というだけで済む話でもない。内向きの姿勢から脱却し、日本が苦手としてきた自主外交力を養う局面だ。／敵と味方を措定する冷戦時代の認識は通用しない。多元的でしたたかな手腕が求められている。そんな中、安倍政権は日米同盟強化を図り、中国への圧力を強める構えだ。では、その上で中国とどう向き合うのか。肝心の道筋が見えてこない。米国にすがるだけでは中国との関係は改善しない。「日米基軸」以外に外交目標が存在しない日本外交の弱みを露呈したかたちだ。



領土問題が浮上すると、日本にも中国にもナショナリズムが台頭する。これを拡大再生産しているのがメディアである。とりわけマスメディアの責任は大きい。偏狭な「領土ナショナリズム」に踊らされず、「国民の利益」を冷静に見極める能力が国民の側にも求められている。／中国では尖閣国有化が近代日本の覇権主義の象徴あるいは延長線上の行為と捉えられている、との指摘もある。日本でも中国の覇権主義的イメージが定着しつつある。日本人の「嫌中」、中国人の「反日」の本質から目を背けず、丁寧に解きほぐす努力が欠かせない。／対話を重ね、相互理解を深める中で、尖閣問題は領有権の棚上げを模索するのが賢明だろう。その上で、突発的な軍事衝突を防ぐメカニズムの構築と、漁業トラブルを回避するルールづくりを先行させるのが現実的ではないか。



沖縄は台湾とともに尖閣海域を「生活圏」として共有してきた利害の当事者である。問題解決にコミットする大義はある。近代日本の版図に包摂され、その帰結として地上戦の悲劇を被った沖縄の教訓は、日中の強硬路線の転換を促す触媒になり得る。／どうすれば争いのない「共生の海」を長期的に維持できるのか。その解は、近代国家の「固有の領土」という価値概念からは見つけられそうにない。歴史的経験に基づき、平和の懸け橋となる万国津梁（りょう）の理念の提示こそ沖縄が果たすべき役割だろう。